

てつけていふが心をとりする事也

〔倭訓栞前編九〕こゝろやまし。詩に我心ヤヒス癒と見えたり伊勢物語に心やみけり

〔源氏物語二〕つねのうちとけるたるかたには侍らで心やましき物ごしにてなんあひて侍り

し

〔藤原清正集〕いかでとおもひける人にはつかにあひたりけれどいらへなどもことにせざりけ

るに月も朧なり

おぼつかな曇れる空の月なれば心やましきよはにもある哉

〔新撰字鏡連字〕跳躑遊意之貌安心之貌喜也心與之又心也留

〔倭訓栞前編九〕こゝろやり略遣情の義心慰也といへり

〔萬葉集十七〕遊覽布勢水海賦一首并短歌此海者有射水郡越中舊江村也

物能乃敷能夜蘇等母乃乎能於毛布度知許己呂也良武等宇麻奈米底宇知久知夫利乃之良奈美

能安里蘇爾與須流略

〔源氏物語三十四〕御くらゐをさらせたまへれどなをその世にたのみそめたてまつり給へる人

人はいままもなつかしくめでたき御ありさまを心やり所にまいりつかうまつり給かぎりは心

をつくしておしみきこえ給ふ

〔倭訓栞中編八〕こゝろゆかし。心の行義成べし

〔後拾遺和歌集十七〕大井にまかりて舟にのり侍けるによめる。大江匡衡朝臣

河舟にのりて心の行ときはしづめる身ともおもほえぬかな

〔夫木和歌抄五月雨〕家集五月雨

船とめしみなとのあしまさほたえて心ゆくらん五月雨のころ

西行上人